



Red Hat Subscription Management All Subscription Docs

RHEL の簡易登録

Red Hat Enterprise Linux システムの簡易登録およびサブスクリプション
エディション 1.0

Red Hat Subscription Management All Subscription Docs RHEL の簡易登録

Red Hat Enterprise Linux システムの簡易登録およびサブスクライブ
エディション 1.0

Red Hat Subscription Management Documentation Team
rhsm-docs@redhat.com

法律上の通知

Copyright © 2013 Red Hat, Inc.

This document is licensed by Red Hat under the [Creative Commons Attribution-ShareAlike 3.0 Unported License](#). If you distribute this document, or a modified version of it, you must provide attribution to Red Hat, Inc. and provide a link to the original. If the document is modified, all Red Hat trademarks must be removed.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux ® is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java ® is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS ® is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL ® is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js ® is an official trademark of Joyent. Red Hat Software Collections is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack ® Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書は、Red Hat Enterprise Linux システムを迅速に登録し、サブスクリプションを効率的にアタッチして管理するための基本情報を説明します。Subscription Manager の高度な設定についてはRed Hat Subscription Manager の使用および設定を参照してください。

目次

1. RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER ツールの使用	2
1.1. Red Hat Subscription Manager UI の起動	2
1.2. subscription-manager コマンドラインツールの実行	3
2. システムの登録および登録解除	4
2.1. UI からの登録	4
2.2. コマンドラインからの登録	9
2.3. Subscription Asset Manager へのシステム登録	11
2.4. 登録解除	12
3. サブスクリプションのアタッチと削除	12
3.1. UI を使用したサブスクリプションのアタッチと削除	12
3.1.1. サブスクリプションのアタッチ	12
3.1.2. サブスクリプションの削除	14
3.2. コマンドラインを使用したサブスクリプションのアタッチと削除	15
3.2.1. サブスクリプションのアタッチ	15
3.2.2. コマンドラインを使用したサブスクリプションの削除	16
4. ベンダーサブスクリプションの有効化	17
4.1. UI を使用したサブスクリプションの有効化	17
4.2. コマンドラインを使用したサブスクリプションの有効化	18
5. SUBSCRIPTION ASSET MANAGER のアクティベーションキーを使用したサブスクリプションのアタッチ方法	19
6. システムの詳細設定	19
6.1. UI での詳細設定	19
6.2. コマンドラインを使用したサービスレベルの設定	20
6.3. コマンドラインで希望するオペレーティングシステムのリリースバージョンの設定	21
7. サブスクリプションの有効期限と通知の管理	22
A. 改訂履歴	26

資産管理を効果的に行うには、ソフトウェアインベントリ（ソフトウェアがインストールされている製品タイプとシステム数の両方）を処理するメカニズムが必要です。

Red Hat Subscription Manager は、ローカルシステムにインストールして、インストールされている製品、システムで利用可能なサブスクリプション、およびシステムで実際に使用しているサブスクリプションをトラッキングできます。また、サブスクリプションの有効期限をトラッキングし、製品とおよびハードウェアに基づいて、新しいサブスクリプションを自動的に割り当てます。

Red Hat Subscription Manager は、コンテンツ管理ツール (**yum**) と連動して、ローカルシステムのコンテンツをインストールおよび更新します。

ほとんどのシステムでは登録が簡単になります。デフォルトの設定では、企業のメインアカウントを使用して、**Red Hat** カスタマーポータルにホストされているシステムを登録します。また、**Subscription Asset Manager** などのサブスクリプションサービスを使用してシステムを登録したり、**Subscription Manager** 設定に多少の修正を加えて使用することもできます。**Subscription Manager** の高度な設定と使用方法は、サブスクリプション管理のドキュメントの『**Red Hat Subscription Manager** の使用および設定』を参照してください。

1. RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER ツールの使用

Red Hat Subscription Manager と呼ばれるローカルシステム上の UI および CLI のツールが、登録とサブスクリプションの両方を管理します。



注記

システムに加える変更の性質上、**Red Hat Subscription Manager** のツールは常に **root** で実行する必要があります。しかし、**Red Hat Subscription Manager** がサブスクリプションサービスに接続する際は、サブスクリプションサービスのユーザーアカウントを使用します。

1.1. Red Hat Subscription Manager UI の起動

Red Hat Subscription Manager は、トップパネルのシステム => 管理 メニューに、管理ツールの一つとして表示されます。

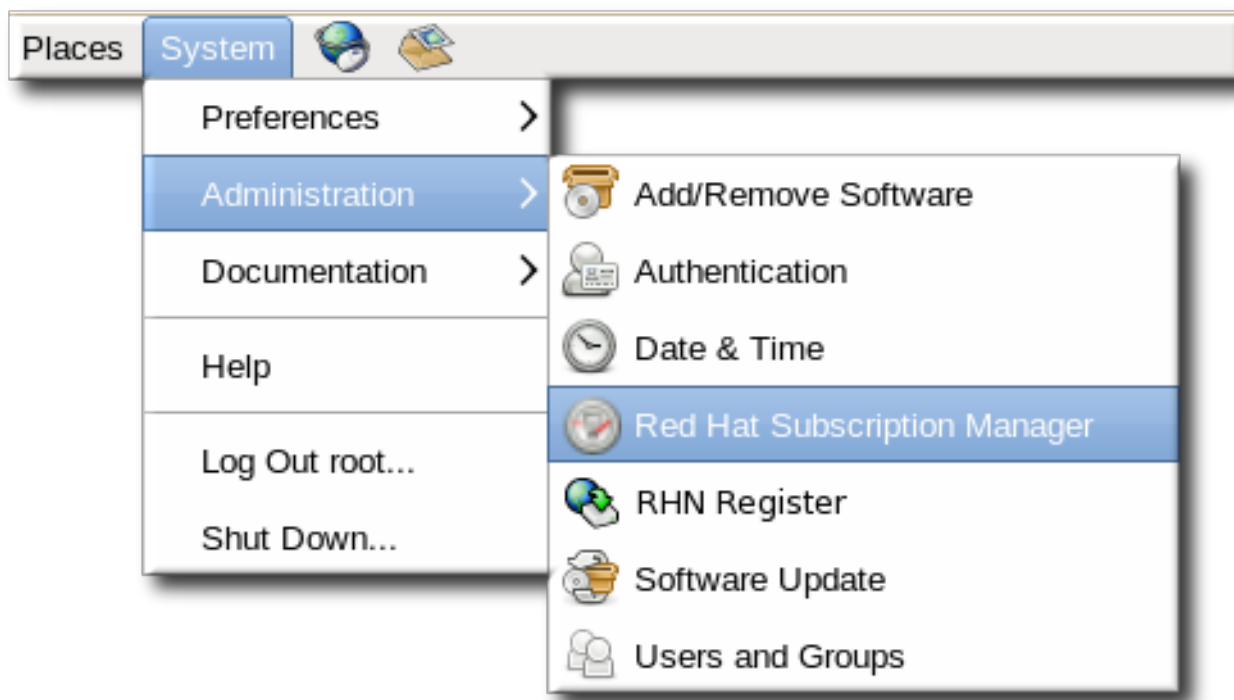


図1 Red Hat Subscription Manager メニューオプション

また、コマンドを1つ実行して、コマンドラインから Red Hat Subscription Manager UI を開くこともできます。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager-gui
```

1.2. subscription-manager コマンドラインツールの実行

Red Hat Subscription Manager UI を使って実行できる操作はすべて、**subscription-manager** ツールを使用しても実行できます。このツールは以下のフォーマットになります。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager command [options]
```

各コマンドには、それぞれ独自のオプションセットを使用します。詳しくは、**subscription-manager** のヘルプと man ページを参照して下さい。

表1 一般的な subscription-manager コマンド

コマンド	説明
register	新規システムをサブスクリプションサービスに対し登録または特定します。
unregister	マシンの登録解除を行います。サブスクリプションは解除され、サブスクリプションサービスからマシンが削除されます。
attach	マシンに特定のサブスクリプションをアタッチします。

コマンド	説明
redeem	ハードウェアおよび BIOS 情報に基づいて、ベンダーから購入した事前指定済みのサブスクリプションにマシンを自動的にアタッチします。
remove	マシンから特定のサブスクリプションまたはすべてのサブスクリプションを削除します。
一覧	マシンとの互換性があるサブスクリプションを一覧表示します。マシンに実際にアタッチされているサブスクリプションまたはマシンが利用可能な未使用のサブスクリプションのどちらかになります。

2. システムの登録および登録解除

システムは、初回起動のプロセス中またはキックスタート設定の一部として (いずれも『インストールガイド』を参照)、サブスクリプションサービスに登録することができます。システムは、設定完了後に登録することも可能です。また、登録済みのエンタイトルメントサービス内での管理対象外となる場合には、サブスクリプションサービスインベントリーから削除 (登録解除) することもできます。

2.1. UI からの登録

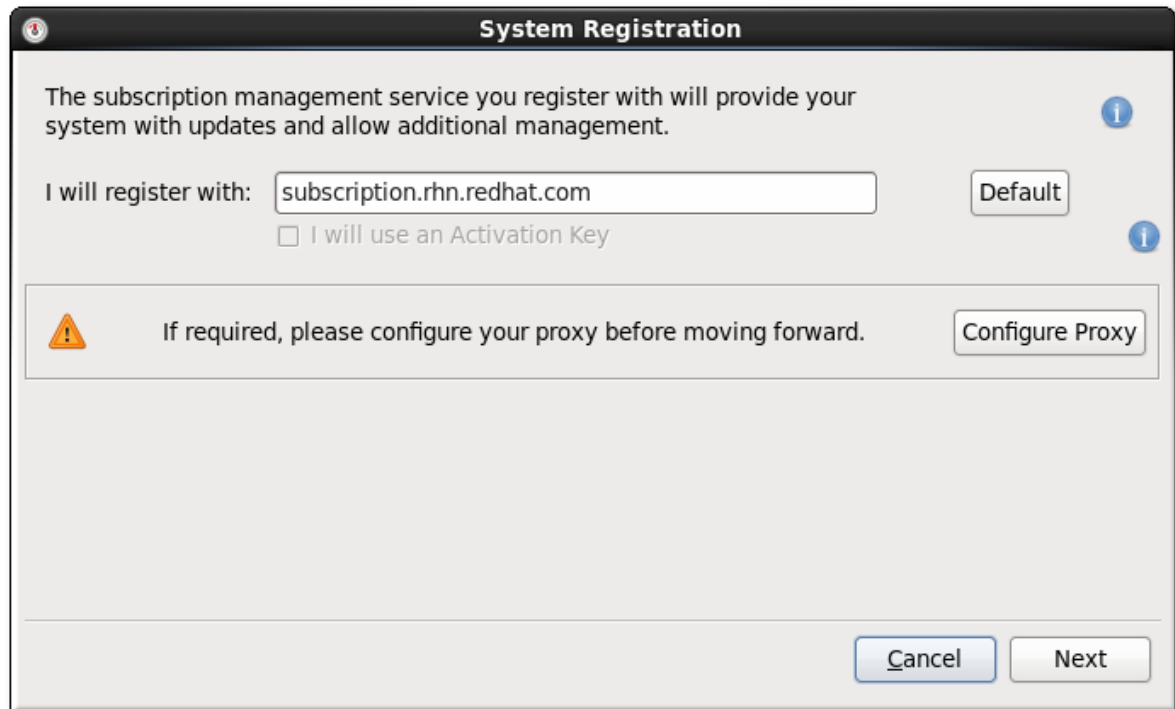
- Subscription Manager を起動します。

```
[root@server ~]# subscription-manager-gui
```

- システムが未登録の場合は、インストール済みの製品 タブの右上隅に **登録** ボタンが表示されます。



- 登録に使用するサブスクリプションサーバーを特定するために、サービスのホスト名を入力します。デフォルトのサービスはカスタマーポータル **Subscription Management** です。ホスト名は **subscription.rhn.redhat.com** になります。**Subscription Asset Manager** などの別のサブスクリプションサービスを使用する場合はローカルサーバーのホスト名を入力します。



証明書ベースのサブスクリプションを認識して使用する各種のサブスクリプションサービスがあります。初回起動時にこれらのサービスにシステムを登録できます。

- カスタマーポータル **Subscription Management**、Red Hat でホストしているサービス (デフォルト) です。
- **Subscription Asset Manager**: オンプレミスのサブスクリプションサーバーです。プロキシとして動作し、コンテンツ配信をカスタマーポータルのサービスに送信します。
- **Satellite 6**: オンプレミスのサービスです。サブスクリプションサービスとコンテンツ配信の両方を処理します。

4. ログインするサブスクリプションサービスのユーザー認証情報を入力します。



The image shows a 'System Registration' dialog box with a blue title bar. It contains two main sections. The first section, 'Please enter your Red Hat account information:', has a 'Login:' field with 'admin@example.com' and a 'Password:' field with masked characters. Below this is a tip icon and text: 'Tip: Forgot your login or password? Look it up at http://red.ht/lost_password'. The second section, 'Please enter the following for this system:', has a 'System Name:' field with 'server.example.com' and a checkbox labeled 'Manually assign subscriptions after registration'. At the bottom right are 'Cancel' and 'Register' buttons.

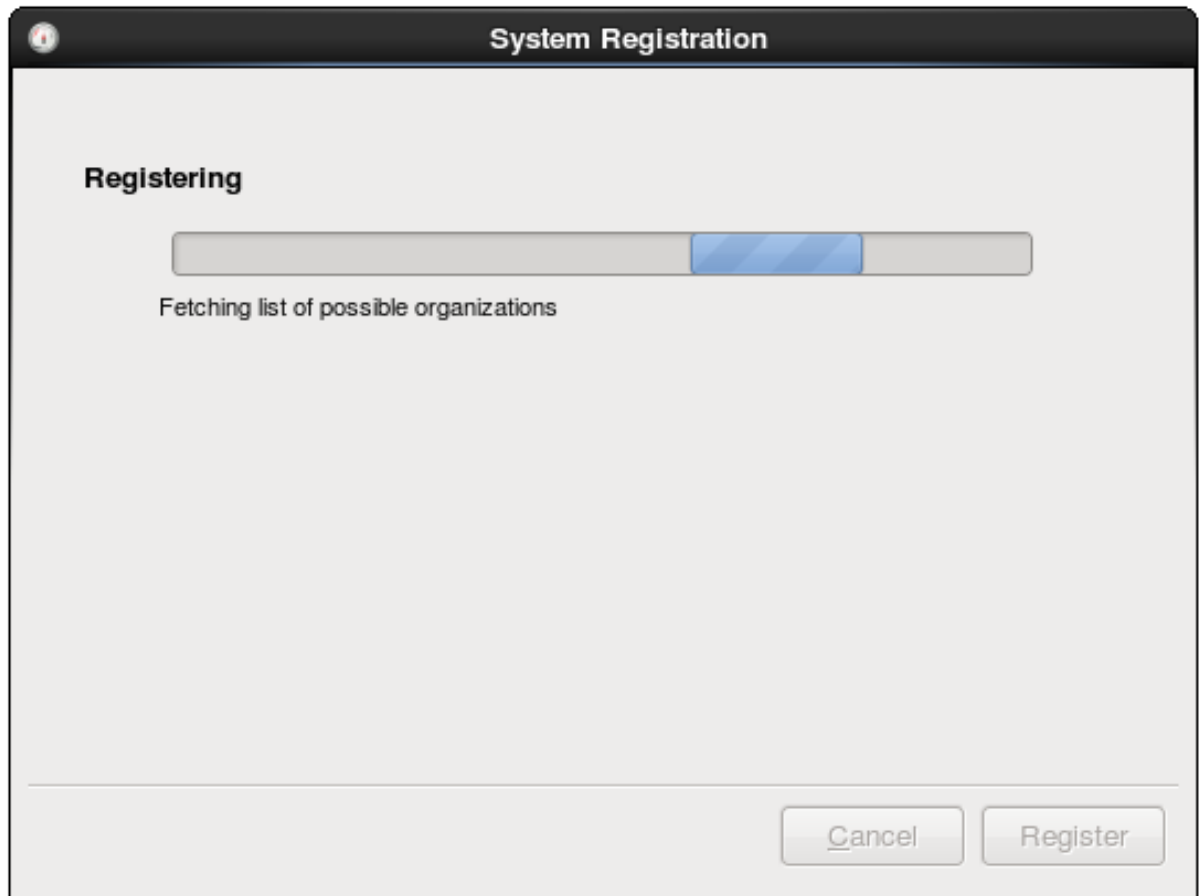
使用するユーザー認証情報はサブスクリプションサービスによって異なります。カスタマーポータルに登録する場合は、管理者または企業アカウントの Red Hat Network 認証情報を使用します。

ただし、Subscription Asset Manager または Satellite 6 では、使用するユーザーアカウントをオンプレミスのサービス内で作成するため、おそらくカスタマーポータルのユーザーアカウントとは異なります。

5. オプションで、登録の後に手動でサブスクリプションを割当て チェックボックスを選択することもできます。

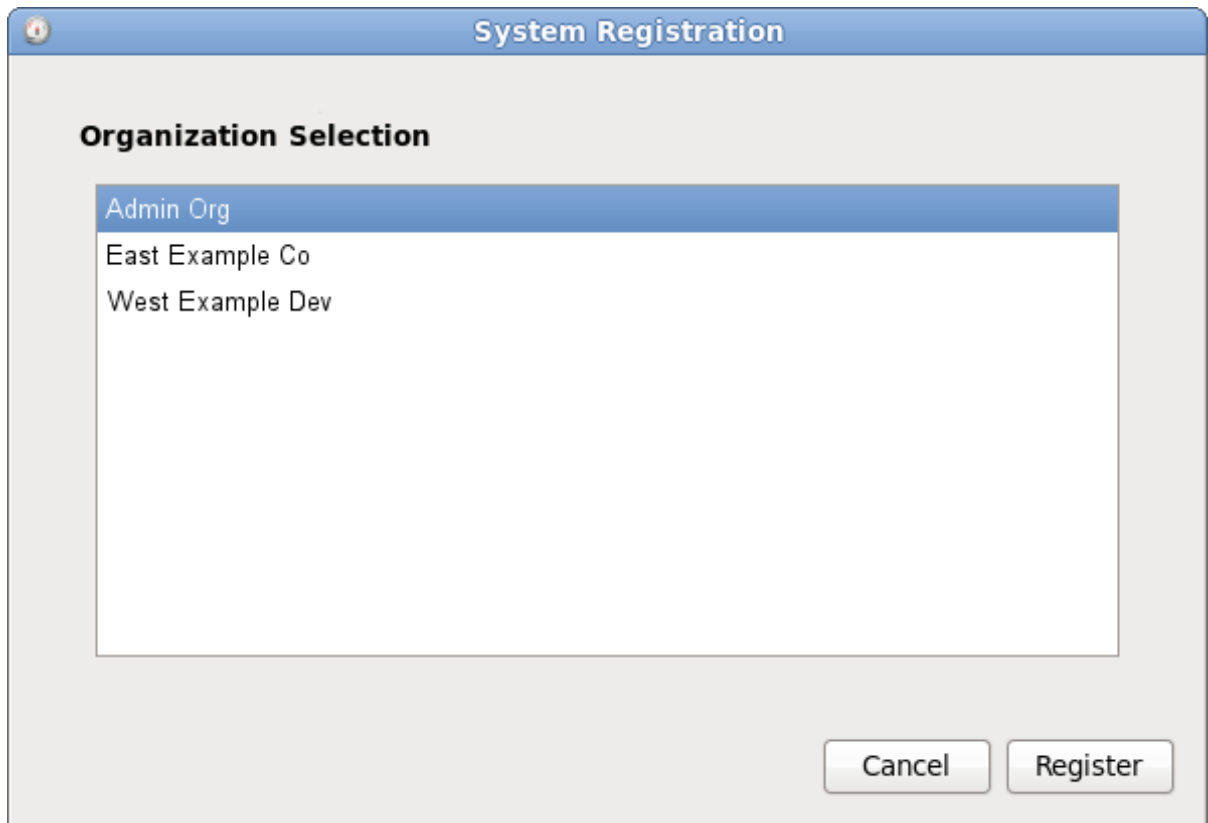
デフォルトでは、登録プロセスでシステムに最適なサブスクリプションが自動的にアタッチされます。「サブスクリプションのアタッチと削除」にあるように、この機能を無効にしてサブスクリプションを手動で選択できるようにすることも可能です。

6. 登録が始まると、Subscription Manager はシステムを登録する組織および環境 (組織内のサブドメイン) をスキャンします。



カスタマーポータルでの **Subscription Management** を使用する IT 環境では組織は 1 つのみとなるため、これ以上必要な設定はありません。**Subscription Asset Manager** などのローカルのサブスクリプションサービスを使用する IT インフラストラクチャーの場合、複数の組織が設定されていることがあります。また、それらの組織内にはさらに複数の環境が設定されている場合もあります。

複数の組織が検出された場合、参加するサービスを選択するプロンプトが **Subscription Manager** により表示されます。



7. デフォルト設定では、サブスクリプションは自動的に選択され、システムにアタッチされません。システムにアタッチするサブスクリプションを確認して、確定します。
 1. プロンプトが表示されたら、検出されたサブスクリプションに使用するサービスレベルを選択します。



2. Subscription Manager により、選択されたサブスクリプションが表示されます。ウィザードの **サブスクライブ** ボタンをクリックして、このサブスクリプションを確定します。



2.2. コマンドラインからの登録

マシンを登録する最も簡単な方法は、**register** コマンドで、認証に必要なユーザーアカウント情報をカスタマーポータルでの **Subscription Management** に渡すことです。システムが正しく認証されると、新しく割り当てられたシステムインベントリー ID と、それを登録したユーザーのアカウント名がエコーバックされます。

register のオプション一覧は、表2「[register オプション](#)」に記載されています。

例1 カスタマーポータルへのシステム登録

```
[root@server1 ~]# subscription-manager register --username admin-example
--password secret
```

```
The system has been registered with id: 7d133d55-876f-4f47-83eb-
0ee931cb0a97
```

例2 登録中の自動サブスクリプション

register コマンドには **--auto-attach** というオプションがあります。このオプションを使用すれば、1つのコマンドで、システムをサブスクリプションサービスに登録し、そのシステムのアーキテクチャーに最適なサブスクリプションをアタッチすることができます。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager register --username admin-example
--password secret --auto-attach
```

これは、Subscription Manager UI のデフォルト設定で登録する場合と同じ動作です。

表2 register オプション

オプション	説明	必須
<code>--username=name</code>	コンテンツサーバーのユーザーアカウント名を指定します。	必須
<code>--password=password</code>	ユーザーアカウントのパスワードを指定します。	必須
<code>--serverurl=hostname</code>	使用するサブスクリプションサービスのホスト名を指定します。デフォルトは Customer Portal Subscription Management (subscription.rhn.redhat.com) です。このオプションを使用しないと、システムはカスタマーポータルの Subscription Management に登録されます。	Subscription Asset Manager または Satellite 6 の場合
<code>--baseurl=URL</code>	更新を受け取るコンテンツ配信サーバーのホスト名を指定します。 Customer Portal Subscription Management と Subscription Asset Manager のいずれも Red Hat がホストするコンテンツ配信サービスを使用します。URL は <code>https://cdn.redhat.com</code> です。 Satellite 6 は独自のコンテンツをホストしているため、 Satellite 6 に登録するシステムはこの URL を使用する必要があります。	Satellite 6 の場合
<code>--org=name</code>	システムの参加先となる組織を指定します。	ホスト型環境以外では必須
<code>--environment=name</code>	1つの組織内の1つの環境にシステムを登録します。	オプション
<code>--name=machine_name</code>	登録するシステム名を設定します。デフォルトではホスト名と同じです。	オプション
<code>--auto-attach</code>	互換性がある最適なサブスクリプションを自動的にアタッチします。1つのコマンドでシステムを設定できるため、自動設定の操作に適しています。	オプション

オプション	説明	必須
<code>--activationkey=key</code>	登録プロセスの一環として、既存のサブスクリプションをアタッチします。サブスクリプションは、ベンダーまたはシステム管理者が Subscription Asset Manager を使用して事前に割り当てています。	オプション
<code>--servicelevel=None Standard Premium</code>	マシン上でサブスクリプションに使用するサービスレベルを設定します。これは <code>--auto-attach</code> オプションでのみ使用されます。	オプション
<code>--release=NUMBER</code>	システムのサブスクリプションで使用するオペレーティングシステムのマイナーリリースを設定します。製品と更新は、この特定のマイナーリリースバージョンに限定されます。 <code>--auto-attach</code> オプションでのみ使用されます。	オプション
<code>--force</code>	システムが登録済みの場合でも登録します。通常、マシンが登録済みの場合には、登録の操作は失敗します。	オプション

2.3. Subscription Asset Manager へのシステム登録

1. 設定 RPM をインストールするか、Red Hat Subscription Manager を設定して Subscription Asset Manager インスタンスを指定します。以下の標準 URL で利用可能な設定 RPM がすべての Subscription Asset Manager サーバーにあります。

```
http://sam_server_hostname/pub/candlepin-cert-consumer.noarch.rpm
```

以下に例を示します。

```
[root@server ~]# rpm -ivh http://sam.example.com/pub/candlepin-cert-consumer.noarch.rpm
```

2. `subscription-manager` コマンドを実行してシステムを登録します。組織名が必須になります。このコマンドでユーザー名またはパスワードを渡さないと、入力を求めるプロンプトが表示されます。 `--auto-attach` を使用して自動的にサブスクリプションを適用することは必須ではありませんが、このオプションを使用すれば新しいシステムを設定するのが容易になります。

```
[root@server ~]# subscription-manager register --username=jsmith --password=secret --org="IT Dept" --auto-attach
```

このコマンドは `root` で実行してください。

2.4. 登録解除

マシンの登録解除に必要な操作は、**unregister** コマンドの実行のみです。これにより、サブスクリプションサービスから対象となるシステムのエントリーが削除され、サブスクリプションもすべて削除されます。また、そのシステムの ID とサブスクリプション証明書もローカルで削除されます。

コマンドラインでのシステム登録解除には、**unregister** コマンドのみが必要となります。

例3 システムの登録解除

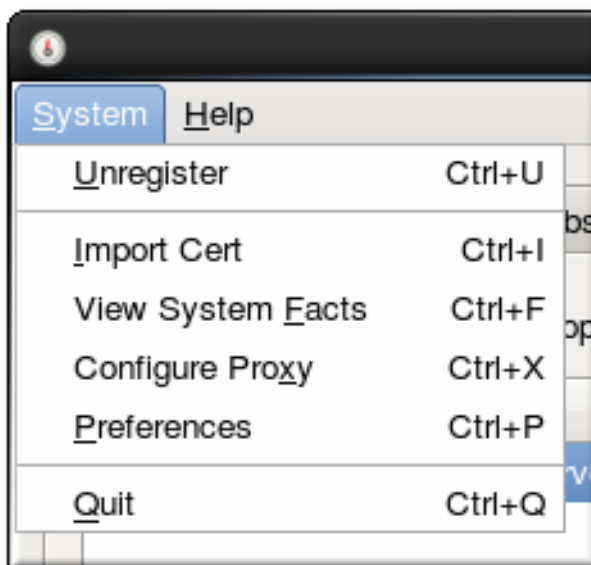
```
[root@server1 ~]# subscription-manager unregister
```

Subscription Manager UI からの登録解除:

1. Subscription Manager UI を開きます。

```
[root@server ~]# subscription-manager-gui
```

2. システムメニューを開いて、**登録解除** を選択します。



3. システムの登録解除を確認します。

3. サブスクリプションのアタッチと削除

システムにサブスクリプションを割り当てることで、そのシステムはサブスクリプション内の Red Hat 製品をインストール、更新することができるようになります。サブスクリプションとは、購入した全製品の全バリエーションの一覧であり、製品とサブスクリプションが利用できる回数を定義します。この数量は、概して利用可能なユーザーライセンス数です。これらのライセンスの1つがシステムに割り当てられると、そのサブスクリプションはそのシステムにアタッチされます。

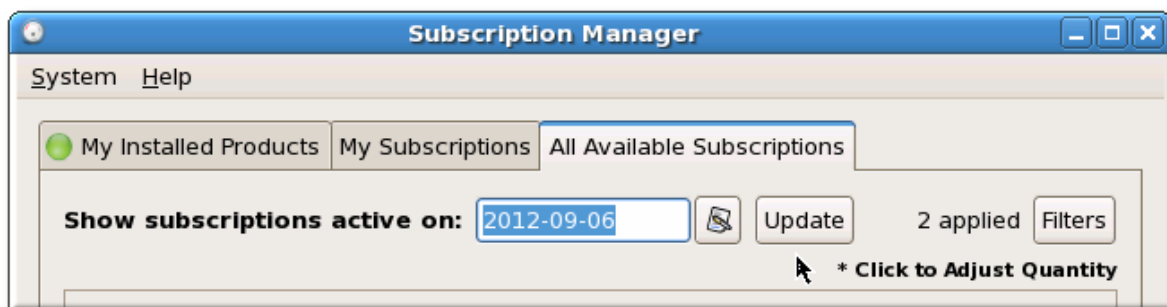
3.1. UI を使用したサブスクリプションのアタッチと削除

3.1.1. サブスクリプションのアタッチ

1. Subscription Manager を起動します。

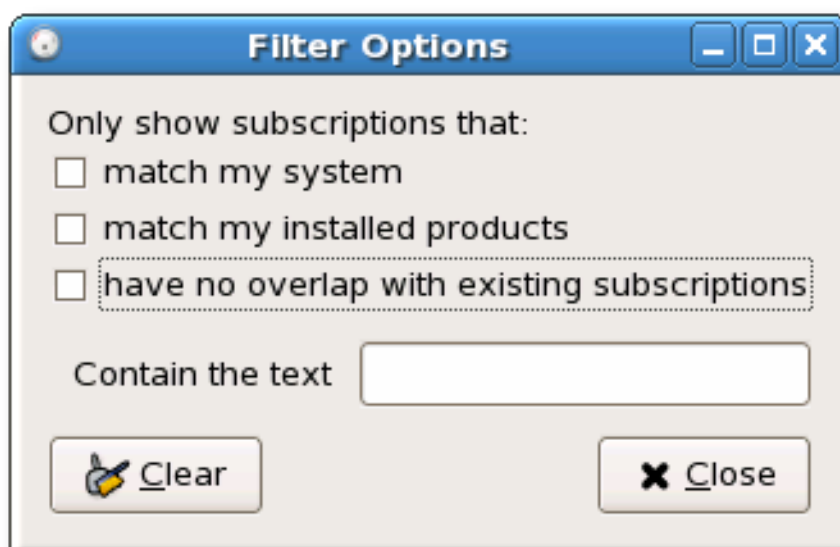
```
[root@server ~]# subscription-manager-gui
```

2. すべての利用可能なサブスクリプション タブを開きます。
3. オプションとして、日付の範囲を設定してから フィルター ボタンをクリックし、利用可能なサブスクリプションを検索します。



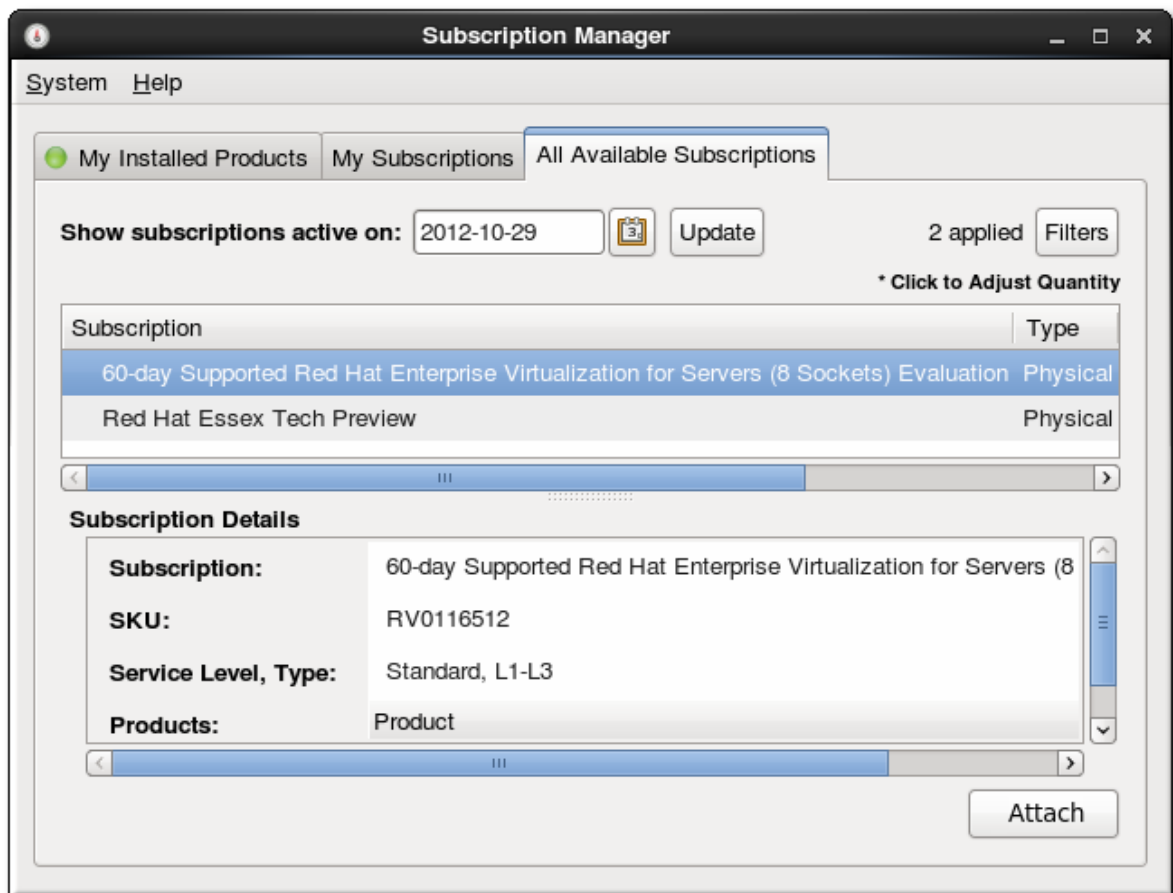
サブスクリプションは、アクティブな日付や名前でもフィルタリングできます。また、チェックボックスを使用すると、より詳細なフィルタリングが可能です。

- 自分のシステムにマッチを選択すると、システムアーキテクチャーに適合するサブスクリプションのみが表示されます。
- 自分のインストール済み製品にマッチを選択すると、システム上に現在インストール済みの製品と機能するサブスクリプションが表示されます。
- 既存のサブスクリプションとの重複をしないを選択すると、製品が重複しているサブスクリプションが除外されます。サブスクリプションがすでに特定の製品のシステムにアタッチされている場合や、複数のサブスクリプションが同じ製品を提供している場合は、サブスクリプションサービスがそれらのサブスクリプションをフィルタリングして、最適なサブスクリプションのみが表示されます。
- 次のテキストを含むは、サブスクリプションやプール内で製品名などの文字列を検索します。



日付とフィルターの設定後、更新 ボタンをクリックして適用します。

4. 利用可能なサブスクリプションを1つ選択します。



5. サブスクライブ ボタンをクリックします。

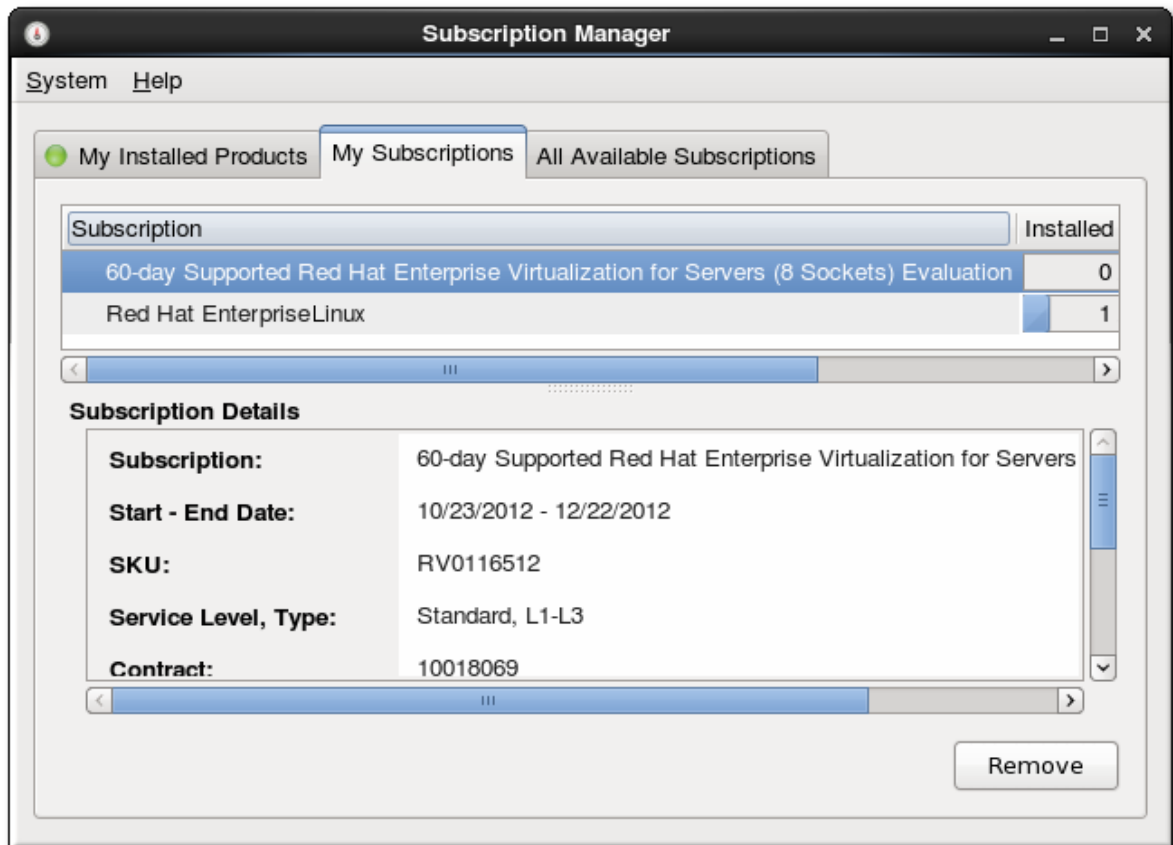
3.1.2. サブスクリプションの削除

1. Subscription Manager を起動します。

```
[root@server ~]# subscription-manager-gui
```

2. 自分のサブスクリプション タブを開きます。

システムに現在アタッチされているすべてのアクティブなサブスクリプションが一覧表示されます (そのサブスクリプションで利用できる製品は、インストール済みの場合と未インストールの場合があります)。



3. 削除するサブスクリプションを選択します。
4. ウィンドウの右下にある **削除** ボタンをクリックします。

3.2. コマンドラインを使用したサブスクリプションのアタッチと削除

3.2.1. サブスクリプションのアタッチ

サブスクリプションをシステムにアタッチするには、**--pool** オプションを使用して、個別の製品またはサブスクリプションを指定する必要があります。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager attach --pool=XYZ01234567
```

attach コマンドのオプション一覧は表3「[attach オプション](#)」に記載されています。

購入した製品のサブスクリプションプール ID を指定する必要があります。このプール ID は製品サブスクリプション情報に表示され、**list** コマンドを実行すると確認できます。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager list --available
+-----+
      Available Subscriptions
+-----+
ProductName:      RHEL for Physical Servers
ProductId:        MKT-rhel-server
PoolId:           ff8080812bc382e3012bc3845ca000cb
Quantity:         10
Expires:          2011-09-20
```

もしくは、**--auto** オプション (**register** コマンドの **--auto-attach** オプションに類似) を使用して、システムに、サブスクリプションサービスが特定した最適なサブスクリプションをアタッチすることもできます。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager attach --auto
```

表3 attach オプション

オプション	説明	必須
--pool=pool-id	システムにアタッチするサブスクリプション ID を指定します。	--auto の使用時以外は必須
--auto	システムを1つ以上の最適なサブスクリプションに自動的にアタッチします。	オプション
--quantity=number	複数カウントのサブスクリプションをシステムにアタッチします。これは、カウント制限を定義するサブスクリプションを対象に使用されます (例: 2 ソケットサーバー用のサブスクリプションを 2 つ使用して、1 台の 4 ソケットマシンに適用)。	オプション
--servicelevel=None Standard Premium	マシン上でサブスクリプションに使用するサービスレベルを設定します。これが使われるのは、 --auto オプションと一緒にのみです。	オプション

3.2.2. コマンドラインを使用したサブスクリプションの削除

1 つのシステムを、複数のサブスクリプションおよび製品にアタッチすることができます。同様に、1 つまたはすべてのサブスクリプションを、システムから削除することもできます。

remove コマンドに **--all** オプションを付けて実行すると、システムに現在アタッチされている製品サブスクリプションとサブスクリプションプールがすべて削除されます。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager remove --all
```

単体の製品サブスクリプションを削除することもできます。各製品には、識別のために **X.509** 証明書がインストールされています。削除する製品サブスクリプションは、**remove** コマンドで **X.509** 証明書の ID 番号を参照して特定します。

1. 製品サブスクリプションを削除する場合は、製品証明書のシリアル番号を取得してください。シリアル番号は **subscription#.pem** ファイル (例: **39272955585697907.pem**) から、または以下のように **list** コマンドを使って取得できます。

```
[root@server1 ~]# subscription-manager list --consumed
```

```
+-----+
      Consumed Product Subscriptions
+-----+

ProductName:      High availability (cluster suite)
ContractNumber:   0
SerialNumber:     11287514358600162
Active:           True
Begins:           2010-09-18
Expires:          2011-11-18
```

2. `subscription-manager` ツールを `--serial` オプションで実行し、証明書を特定します。

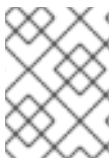
```
[root@server1 ~]# subscription-manager remove --
serial=11287514358600162
```

4. ベンダーサブスクリプションの有効化

システムで利用可能な既存のサブスクリプションを使用して、そのシステムを設定することができます。サードパーティーベンダーから購入した一部のシステムには、Red Hat 製品のサブスクリプションがそのマシン購入に含まれています。

Red Hat Subscription Manager は、システムハードウェアと BIOS に関する情報をシステム情報にプルし、ハードウェアベンダーを認識します。ベンダーと BIOS 情報が特定の設定に一致する場合は、サブスクリプションを **有効** にできます。これにより、サブスクリプションをシステムに自動的にアタッチすることができます。

4.1. UI を使用したサブスクリプションの有効化



注記

有効にするサブスクリプションがマシンにない場合、**Redeem (有効化)** メニュー項目は表示されません。

1. Subscription Manager を起動します。

```
[root@server ~]# subscription-manager-gui
```

2. 必要に応じて「[UIからの登録](#)」にあるとおり、システムを登録します。
3. ウィンドウの左上隅にあるシステムメニューを開き、**Redeem (有効化)** 項目をクリックします。



- 有効化が完了した時点で送信する通知の宛先となる電子メールアドレスを、ダイアログウィンドウ内に入力します。有効化のプロセスは、ベンダーに連絡して事前定義されたサブスクリプションの情報を受け取るのに数分かかる場合があるため、通知メッセージは **Subscription Manager** のダイアログウィンドウではなく、電子メールで送られます。



- Redeem (有効化)** ボタンをクリックします。

確認の電子メールが届くまで、最大10分程度かかる場合があります。

4.2. コマンドラインを使用したサブスクリプションの有効化



注記

サブスクリプションサービスがシステムとそのサブスクリプションを適切に特定するには、マシンを **最初** に登録する必要があります。

マシンのサブスクリプションを有効化するには、**redeem** コマンドで、プロセスが完了した時点で有効化の通知メールを受け取る電子メールアドレスを指定して実行します。

```
# subscription-manager redeem --email=jsmith@example.com
```

5. SUBSCRIPTION ASSET MANAGER のアクティベーションキーを使用したサブスクリプションのアタッチ方法

ローカルの Subscription Asset Manager は、システムが使用するサブスクリプションを事前設定できます。この事前定義されたサブスクリプションのセットは、アクティベーションキーで識別されます。このアクティベーションキーは、ローカルシステムでサブスクリプションをアタッチする際に使用します。

Subscription Asset Manager のアクティベーションキーは、新規システム登録プロセスの一環で使用できます。

```
# subscription-manager register --username=jsmith --password=secret --  
org="IT Dept" --activationkey=abcd1234
```

組織が複数ある場合はシステムの組織を指定する必要があり、この情報はアクティベーションキーでは定義されていません。

6. システムの詳細設定

サブスクリプションの自動アタッチは、システムにアタッチするサブスクリプションを選択します。これは、現在インストール済みの製品、ハードウェア、アーキテクチャーなどの各種基準に基づいて行われます。Subscription Manager が使用する詳細設定で以下の2つをさらに設定することが可能です。

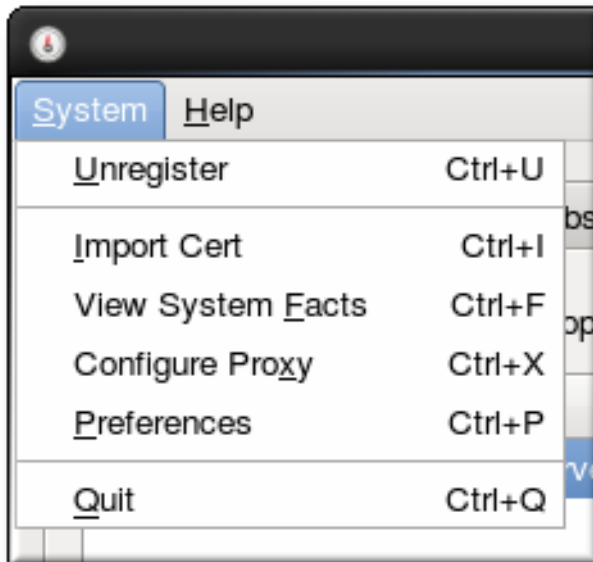
- サブスクリプションのサービスレベル
- 使用するオペレーティングシステムのマイナーバージョン (X.Y)

これは、自動アタッチをジョブとしてスケジュールした場合に特に有用です。このジョブは毎日実行し、インストール済み製品と現在のサブスクリプションがすべてアクティブになるようにします。

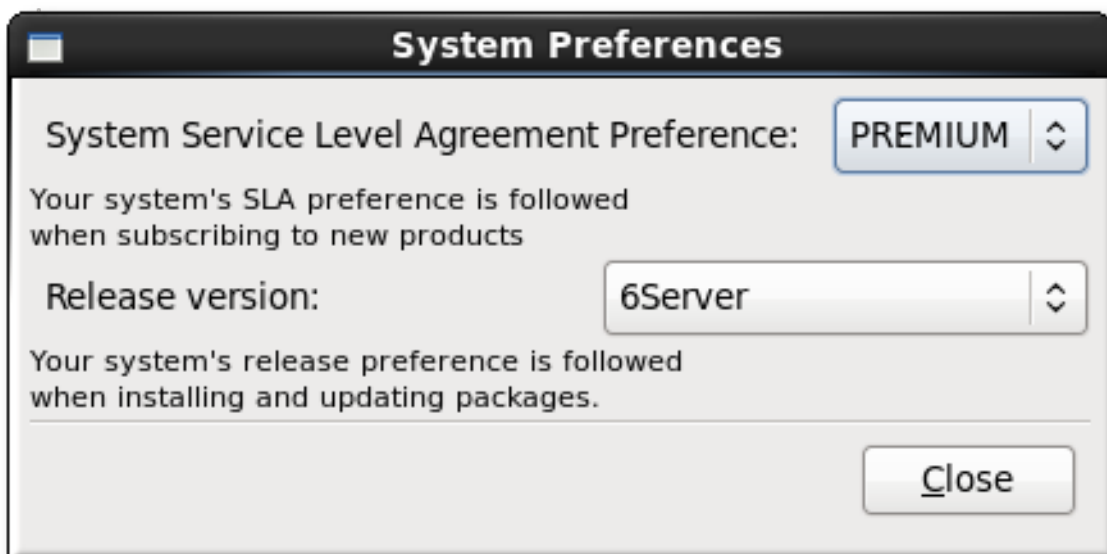
6.1. UI での詳細設定

サービスレベルおよびオペレーティングシステムのリリースバージョンの詳細設定はどちらも、Subscription Manager の **システムの設定** のダイアログボックスで行います。

1. Subscription Manager を開きます。
2. システム メニューを開きます。
3. システムの設定 メニュー項目を選択します。



4. ドロップダウンメニューから希望するサービスレベル同意書の設定を選択します。アクティブなサブスクリプションすべてに基づいて、Red Hat アカウントで利用可能なサービスレベルのみが表示されます。
5. リリースバージョンドロップダウンメニューでオペレーティングシステムのリリース設定を選択します。表示されるバージョンは、アカウントにアクティブなサブスクリプションがある Red Hat Enterprise Linux バージョンのみです。



6. 設定が保存され、今後のサブスクリプションの操作に適用されます。閉じる をクリックしてダイアログを閉じます。

6.2. コマンドラインを使用したサービスレベルの設定

一般的なサービスレベルは、`service-level --set` コマンドを使用して設定できます。

例4 サービスレベル詳細の設定

まず、`service-level` コマンドを `--list` オプションで実行して、システムで利用可能なサービスレベルを表示します。


```
[root@server ~]# subscription-manager service-level --list
+-----+
          Available Service Levels
+-----+
Standard
None
Premium
Self-Support
```

次に、システムで希望するレベルを設定します。

```
[root@server ~]# subscription-manager service-level --set=self-support
Service level set to: self-support
```

ローカルシステムの現在の設定は、**--show** オプションで表示できます。

```
[root@server ~]# subscription-manager service-level --show
Current service level: self-support
```

サービスレベルの設定は、サブスクリプション動作 (システム登録や登録後のサブスクリプションのタッチなど) の実行中に定義できます。これにより、システム設定の上書きが可能です。**register** と **attach** のコマンドでは、**--servicelevel** オプションで動作の詳細を設定できます。

例5 プレミアムサービスレベルでのサブスクリプションの自動タッチ

```
[root@server ~]# subscription-manager attach --auto --servicelevel
Premium
Service level set to: Premium
Installed Product Current Status:
ProductName:          RHEL 6 for Workstations
Status:              Subscribed
```



注記

--servicelevel オプションには、**--auto-attach** オプション (登録用) または **--auto** オプション (タッチ用) が必要です。特定のプールのタッチや、サブスクリプションのインポートには使用できません。

6.3. コマンドラインで希望するオペレーティングシステムのリリースバージョンの設定

IT 環境の多くは、一定のセキュリティーレベルか他の基準に合致していると認定されている必要があります。その場合、主要なアップグレードの計画と管理は注意して行う必要があります。管理者がただ **yum update** を実行して次のバージョンに移行できるものではありません。

リリースバージョンを指定すると、システムが、最新バージョンのリポジトリを自動的に選択するようなことはせず、オペレーティングシステムのバージョンに関連したコンテンツリポジトリにアクセスを制限します。

たとえば、指定したオペレーティングシステムバージョンが6.3の場合は、他のリポジトリが利用可能であっても、システムにインストールされる製品およびアタッチされるサブスクリプションには、常に6.3のコンテンツリポジトリが選ばれます。

例6 登録時のオペレーティングシステムのリリースの設定

リリースバージョンの設定は、システムの登録時に **register** コマンドを **--release** オプションで実行することで設定できます。これによりこのリリース設定は、システム登録時に選択され自動的にアタッチされたサブスクリプションに適用されます。

--auto-attach オプションは、自動的にアタッチするサブスクリプションの選択に使用される基準の1つであるため、詳細設定時に必要となります。

```
[root#server ~]# subscription-manager register --auto-attach --
release=6.4 --username=admin@example.com...
```



注記

リリース設定は、サービスレベルの設定とは異なり、登録時にのみ使用するか、詳細設定として設定できます。**attach** コマンドでは指定できません。

例7 オペレーティングシステムのリリース詳細設定

release コマンドは、アタッチされたサブスクリプションだけでなく、組織で利用可能な購入済みサブスクリプションに基づいて、利用可能なオペレーティングシステムのリリースを表示します。

```
[root#server ~]# subscription-manager release --list
+-----+
          Available Releases
+-----+
6.2
6.3
```

そして、**--set** で詳細設定を利用可能なリリースバージョンの1つに設定します。

```
[root#server ~]# subscription-manager release --set=6.3
Release version set to: 6.3
```

7. サブスクリプションの有効期限と通知の管理

サブスクリプションは、**有効期間** と呼ばれる期間にのみアクティブとなります。サブスクリプションを購入すると、そのコントラクトの開始日と終了日が設定されます。

システムには、複数のサブスクリプションをアタッチすることが可能です。製品にはそれ自体のサブスクリプションが必要です。さらに、一部の製品では、完全にサブスクライブされた状態にするために、複数のサブスクリプションが必要になる場合があります。例えば、16ソケットのマシンでは、ソケット数に対応するため4つの4ソケットのオペレーティングシステムのサブスクリプションが必要になります。

自分のインストール済みソフトウェア タブには、システム全体のサブスクリプションステータスが表示されます。また、有効な製品サブスクリプションが無効になる(有効期限が切れる)最初の日付も表示されます。

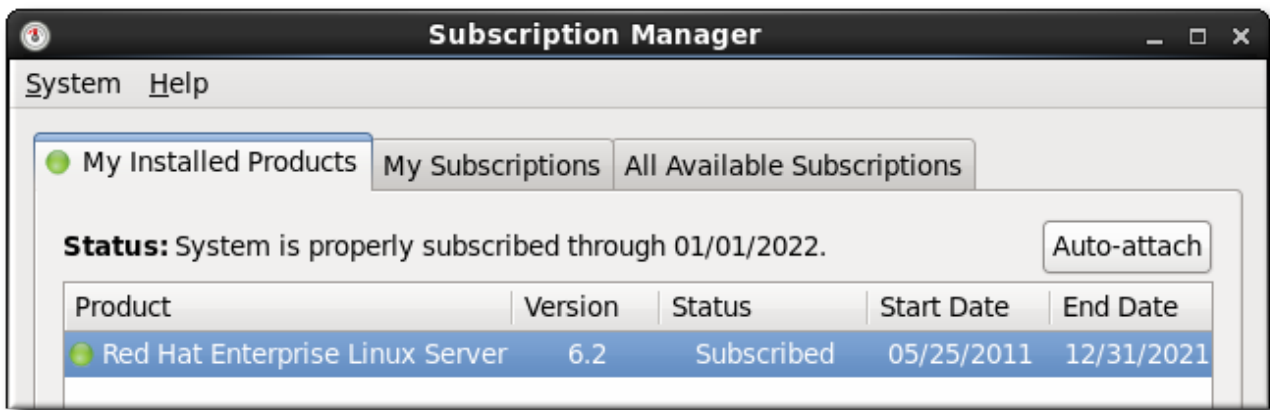


図2 有効期限

Red Hat Subscription Manager は、システムにインストールされた製品の有効な証明書に対するあらゆる変更を示すログと UI メッセージを提供します。Subscription Manager UI では、システムサブスクリプションのステータスは色分けされています。全製品が完全にサブスクライブされている場合は緑色、一部の製品がサブスクライブされていない可能性はあるものの更新が有効な場合は黄色、更新が無効な場合は赤色で表示されます。

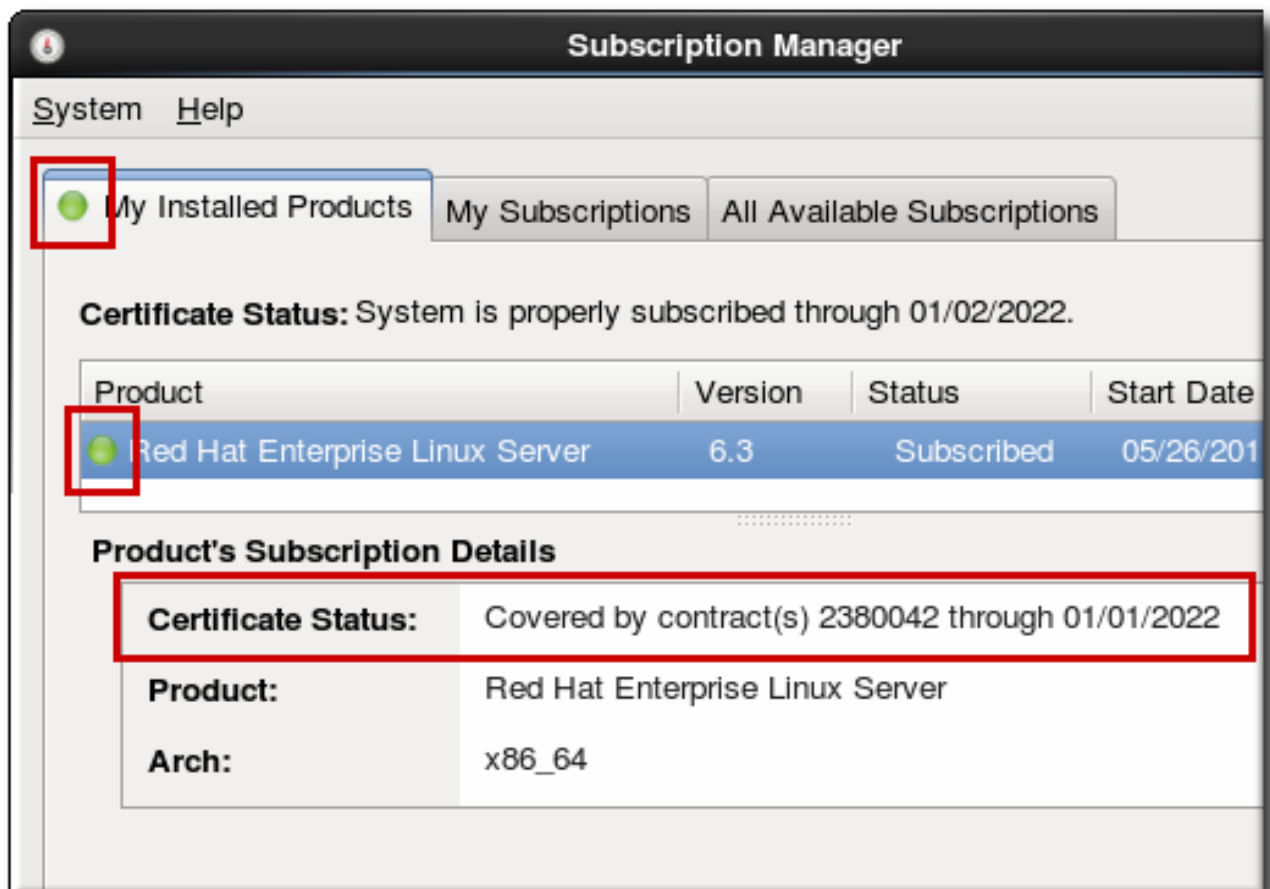


図3 色分けされたステータス表示

マシンのステータスは、コマンドラインツールでも表示されます。緑、黄、赤の色分けは、テキストのステータスメッセージではそれぞれ、**subscribed**、**partially subscribed**、**expired/not subscribed** と表示されます。

```
[root@server ~]# subscription-manager list
+-----+
      Installed Product Status
+-----+

ProductName:           Red Hat Enterprise Linux Server
Status: Not Subscribed
Expires:
SerialNumber:
ContractNumber:
AccountNumber:
```

サブスクリプションの変更に関する警告がある時には、上部のメニューバーに燃料メーター状の小さなアイコンが表示されます。

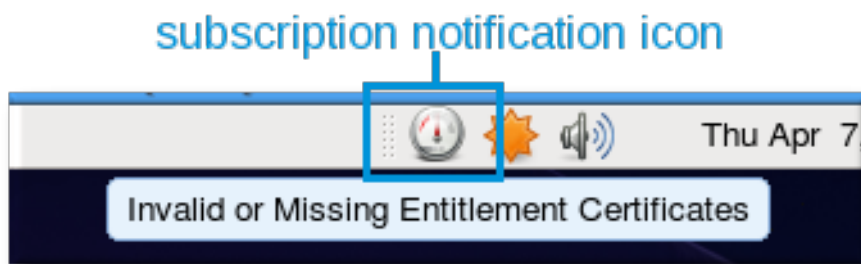
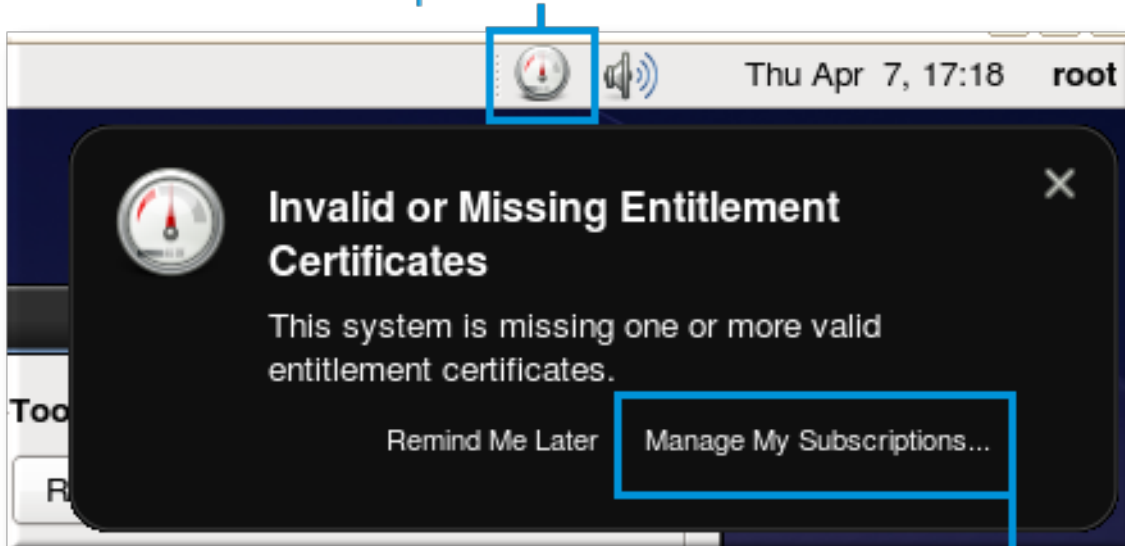


図4 サブスクリプション通知のアイコン

インストール済み製品のサブスクリプションの有効期限が近づくと、**Subscription Manager** デーモンは警告を発します。このメッセージは、システムに有効な証明書のない製品がある場合に表示されるメッセージに似ています。この警告は、製品に対応するサブスクリプションがアタッチされていないか、サブスクリプションの有効期限が切れた後も製品がインストールされていることを意味します。サブスクリプション通知のウィンドウにある **自分のサブスクリプションを管理** のボタンをクリックすると、**Red Hat Subscription Manager UI** が開き、サブスクリプションの確認と更新ができます。

subscription notification icon



launch subscription manager

図5 サブスクリプション警告のメッセージ

Subscription Manager UI を開くと (通知エリアから開いたか、通常の方法で開いたかに関わらず)、製品に有効な証明書が欠けているかどうかを示すアイコンが左上隅に表示されます。無効になった製品に適合するサブスクリプションをアタッチする最も簡単な方法は、**自動アタッチ** ボタンをクリックすることです。

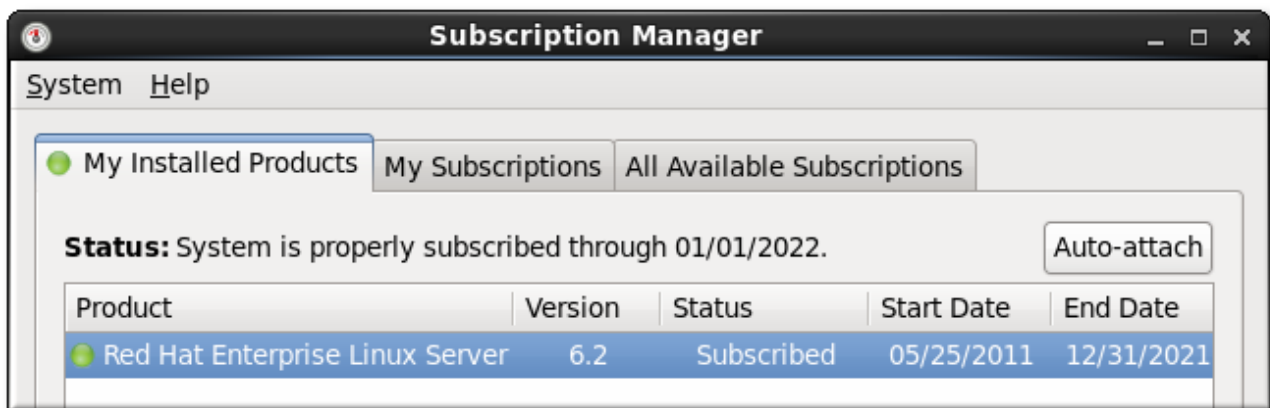


図6 自動アタッチボタン

システムのサブスクリプションのダイアログは、有効な証明書がない特定の製品にあてはまる利用可能なサブスクリプションの対象一覧を表示します (サブスクリプションが利用可能と仮定)。

A. 改訂履歴

改訂 1.3-5.1

Thu Jun 21 2018

Terry Chuang

翻訳ファイルを XML ソースバージョン 1.3-5 と同期

改訂 1.3-5

September 18, 2013

Deon Ballard

新規コンテンツおよび SAM 1.3 リリース用に再編成。